

家庭科

中 田 泉

1 家庭科における見つめ直しのある聞き合い

子どもは、家庭科を学ぶ以前から、それぞれの家庭生活を営んでいる。着ることや食べることなど人間の生活に欠かせない行為を毎日行っている。しかし、これらの行為があまりにも当たり前であるがゆえに、ほとんどの行為は無意識のうちに行われている。したがって、これまで無意識のうちに行われていた行為の意味や目的を、家庭科の授業を通して初めて意識してとらえることになる。どうしてそのように考えるのか、なぜそのようなことをするのか、その考えに至った根拠は何か、どのようにすればよいのかを学んでいく。一人一人の価値観が異なるからこそ、友達とかかわって得られた新たな価値を、自分の生活に取り入れていく意義は大きい。さまざまな状況の中で、得られた価値を使い、生活をよりよくしようとしていく。

子どもの見方や考え方は、ともに暮らす家族の価値観によるところが大きい。自分の生活の仕方が当たり前であり、違う生活の営みに気付く機会が少ない。自分の家族とは違う見方や考え方と出会い、少なからず驚きをもつことになる。正解が一つではないからこそ、友達と課題解決に向けて、受けとめ合う中で複数の考えに出会うことができる。

学習問題に対する受けとめ方には多少なりとも個人差がある。制限時間内においておいしいみそ汁をつくるにはどうすればよいか友達と考えを受けとめ合うことで、調理への意欲が喚起される。異なる考えや価値を受けとめ合い、共感したり、認識の違いを感じたりして、自分でも試したり、考えの根拠を実験で検証しようと思いつめ直していく。見つめ直しでは、受けとめ合いで得られた多くの情報の中から目的に応じて自分で判断し、選択し、決定していかなければならない。友達との聞き合いを繰り返し行う中で、生活の課題を見つけ、生活をよりよくしようと工夫する力を育てていく。

このような家庭科の学びをふまえ、家庭科における見つめ直しのある聞き合いの姿を次のようにとらえた。

身近な生活における課題を 実践的・体験的活動を通して友達と交流し 解決する中で さまざまな観点から生活事象をとらえ 生活への新たな働きかけを構築していく姿

2 見つめ直しへと向かう状態

(1) 確かめたい状態

相手の考えややり方を自分のものと比較したり、観察したりする中で、なぜそのような行為を行うのか考え、自分でも試しにやってみたいと感じ始める。試しにやってみることで、あいまいに考えていたことを科学的な視点で見つめ直す。そして、それを行う理由や隠れた技を見つけ、今まで見えなかったことが見えたり、気付かなかったことに気付いたりすることができる。

(2) 整理したい状態

受けとめ合いで、多くの生活事象に関する情報が手に入り、それらを何をもとに判断したらよいか迷うことがある。また、実験や体験等から感じ取ったことを受けとめ合うと、その結果を整理したり、考察したりしたくなる。一度混乱して

いるものをきちんとした状態に整理することで、状況に応じてどこに価値を認めるのか、判断したり選択したりすることができる。

(3) 意外性を感じている状態

受けとめ合いで得られた知識になるほどと納得し、自分にはなかった意外性のある考えに驚き、もう一度自分の生活についてじっくりと見直してみたいくなる。また、受けとめ合いで得られた意外性のある考えから、違うパターンではどうなるのかと新たな課題が見つかり、考えを見つめ直し、次の受けとめ合いに向かうことができる。

3 受けとめ合いを通して見つめ直すための手だて

(1) 生活行為の意味を意識的にとらえさせる

子どもが無意識に行っていることを問う場面から導入を行うことで、その行為の意味や目的を意識させる。それぞれの家庭でどのようなことが行われているのかを見たり、なぜそのような行為をするのか、その必要性を尋ねたりする。そして、それらを友達と受けとめ合うことで、同じだ、共感できると思わせたり、疑問を感じさせたりする。

また、立場の転換を図る活動を意図的に取り入れる。立場が入れ替わることで意外性のある新たな課題に目を向け、友達とその価値を受けとめ合う。さまざまな視点で生活事象をとらえ直し、もう一度学習問題を見つめ直していく。友達と受けとめ合う中で、自分の生活行為の意味をもう一度考え、見つめ直しに向かう。

(2) 思いや考えが広がる課題を設定する

具体的な生活場面を想定し、家族の一員として課題解決に取り組もうとさせるには、無意識にとらえていた日常の生活事象の中から問題を見つけ、なぜだろう、解決したいと感じさせるような課題を意図的に設定する。正解が一つではない課題を設定することで、複数の価値の中から選ばせていく。一人一人の家庭生活が異なる中で、受けとめ合ったとき、自分の問題として情報を整理し、見つめ直しに向かう。

(3) 自己決定を伴う体験的活動を取り入れる

聞き合いの必要感を生み出すために、食に関する題材では、五感を働かせて感じ取らせる場を設定する。比較実験や試す場を取り入れ、友達と受けとめ合う。そこで得られた価値を確かめたり整理したりする見つめ直しを行うことで、判断基準が明確になり、自己決定へとつなげていく。

(4) 新たな価値と出会うための交流のしかたを工夫する

生活事象に関する視点を増やしたり、深めたりするために、さまざまなグループ構成を目的に応じて編成する。異なる視点・考えを受けとめ合うことで意外性のある新たな価値と出会い、同じ視点・考えに至る過程を受けとめ合うことで、考えの根拠をはっきりとさせようと思わせ見つめ直しに向かい、そこから新たな知識を獲得することができる。

(5) 評価方法を充実させる

自己の学習による学びの成果や受けとめ合いによって互いに学びの充実を自覚したりするために、共通の土台として基準をつくる。基準をつくることで視点がぶれることなく、自己評価や相互評価を行うことができる。

4 実践例

(1) 生活行為の意味を意識的にとらえさせる

① 6年生 「毎日の生活をふり返ろう」

食事や睡眠、入浴などの生活時間は、子どもにとって、これまで当たり前で過ごしてきたも

日	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
月	午前(時)												午後							
日	起床	朝食			学校	学校	学校	学校	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題	宿題
日	●気がついたことや問題点 いつも時間を気にせず、自分の方法でやっていて、いざしきしてやるてきよつく思った。																			

日	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
月	午前(時)												午後							
日	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂	お風呂
日	●気がついたことや問題点 毎日のことをやってその前の時間帯、お風呂をやる時、お風呂をやることにまどろんでいた。																			

資料1 生活時間を平日と休日の2種類で表し色分けする

のであり、無意識に行われてきたことでもある。そこで、自分の生活時間の使い方を平日と休日の2種類に分けて、図に表し色分けさせた(資料1)。その表を見て、気付いたことを見つけるよう指示を出した。その中から、特に食事に関する気づきにしばって全体で受けとめ合いをさせた。

「食事をしている時間が平日は合計2時間、休日は3時間でこんなにも違いが

あるなんて驚いた 朝食は30分も差があった」と平日と休日を比較して気づきを見つける子どもが出てきた。それを受けとめていた子は、「そういえば、私も平日は朝食の時間がとても短いので、しっかり食事をとることが必要だなと感じた」とすでに発表した別の子どもの意見とつなげて自分の意見を述べる子どもが出てきた。食事の時刻に目をつけた子どももいて、「私は、食べている時間はほとんど変わらないんだけど、食べる時刻が休日は2時間も遅かったなんて、気付かなかった」と時間や時刻について自分の生活を見つめ直していた。

このように、平日と休日では子どもの生活パターンが異なるので、その2種類を表に色分けし、生活行為の一つである食事にしてしばって受けとめ合いをさせたことで、日常無意識に行っていた「食べる」という生活行為について自分の生活を意識的にとらえさせることができると考える。

② 6年生 「朝食のとり方を見直そう」

ほとんどの子どもが朝食をとっており、その食事は提供されたものであるため、朝食を食べる必要性やどのような食品をとっているかについて意識することは少なかった。そこで、朝食を食べることは体によいと聞くが、本当に体にとって必要なことなのかを考えさせることにした。

「おなかですぐと勉強に集中できなくなるから必要かなと思ってはいたけれど、脳を活発に働かせるためだなんて知らなかった」「集中できなくなるだけじゃないんだよ 落ち着きもなくなってけがをしやすくなるんだって」「しっかりと朝食を食べると、脳が安心して栄養をたくわえておけるんだね」「やっぱり朝食は必要なんだな」と朝食の必要性について受けとめ合い、朝食をとることの意味を見つめ直していた。

このように、これまで特に意識をしていなかった生活行為について、家族に聞いたり、資料がないか調べたりすることで、何気なく行ってきた行為にこれほどの意味があったのかと、子どもは改めて自分の朝食について見つめ直すことができたと思われる。

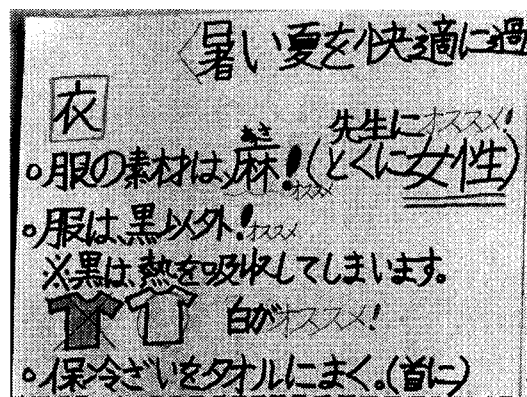
③ 6年生 「工夫しよう 快適な生活」

暑い夏を快適に過ごすための工夫を衣食住の三つの視点で調べさせた。これまで暑い時期になると、特別な意識もなく、半袖の衣服を身に付けたり、夏野菜を食べたり、風鈴を飾ったりしてきた。これまで何気なく行ってきた工夫が、具体的な根拠とともにどのような効果をもたらすのか各自で調べ、お互いに受けとめ合うことで意識できると考えた(資料2 次頁)。

「他の人の意見を聞いてびっくりしたのは夏野菜でした きゅうり、なす、ゴーヤが体を冷や

す効果があるなんて知りませんでした」「これまで暑いから半袖やタンクトップを着ていましたでも素材を考えたことはありませんでしたこれからは、素材にも気を付けて選びたいと思います」「カプサイシンという言葉は聞いたことがあったけど、どんなものに入っているのか、なぜ辛いものが多いのか友達から聞いてよく分かった」

このように、具体的にどのような効果があり、なぜよいのかを受けとめ合わせることで、体の中でどのような変化が起こるのか、具体的な資料を示しながら受けとめ合いをすることができ、子どもは、「なるほど、辛い物を暑い夏に食べるとなぜよいか分かった」などこれまでほとんど意識することのなかったことを初めて意識し、快適に過ごす生活行為のさまざまな工夫について意識的にとらえ、自分の生活を見つめ直すことができたと思われる。



資料2 暑い夏を快適に過ごす工夫を具体的に調べてまとめる

(2) 思いや考えが広がる課題を設定する

① 6年生 「健康的な生活を考えよう」

子どもとかかわりのある先生三人からの注文に献立を立てる〈献立力決定戦・朝食編〉を課題として設定した。家族のための朝食作りを経験している子どもに、今度は先生という共通の相手意識をもたせる課題にすることで、友達と考えを受けとめ合いながら、これまで学んだ知識や技能を使って課題解決に向かわせることができ、一人一人のたくさんの思いや考えが広がると考えた(資料3)。

このように、献立を考える相手を全員が何らかの情報をもつ先生とすることで共通の土台で考えをもつことができた。そして、相手意識をもたせることで、栄養のバランスだけでなく、相手に合わせた献立を考えようと、思いや考えをめぐらせ、それを友達と受けとめ合って、よりよい献立をつくっていけると考える。

T:それぞれの先生の注文に合わせた献立を考えよう
 C1:「A先生の好みがよく分からないから、インタビューしに行こう。」
 C2:「果物をリクエストしているよ。A先生は、梨が好きだから梨にしたらいいと思う。」
 C3:「でも、まだ梨の季節ではないから、旬の果物にしたら栄養もあっていいんじゃないかな。」
 C4:「無機質が足りないから、ヨーグルトやほかの果物と合わせて、フルーツヨーグルトにするとパンにも合うね。」
 C2:「それがいいよ。そうすると、ビタミンももっととれるし、食品の数も増えるね。」

資料3 一人一人の思いを広げていく受けとめ合い

② 6年生 「工夫しよう 快適な生活」

受けとめ合いから見つめ直しに向かうにあたって、全員が共通の土台としての場面設定をすることで、いろいろな視点から思いや考えをもつことができると考えた。また、あえて、自分の生活とは異なる場面を設定することで、一つの考えから、もっと深く課題解決へ向かうことができると考えた。そこで、〈健康と節電に気を付けて、家庭準備室での暑い夏を快適に過ごすにはどうすればよいか〉という課題を設定した。

子どもに、「みんなはこれからの暑い夏どうやって過ごすの」と尋ねてみた。「クーラーがあるから大丈夫」「冷たい飲み物をたくさん飲むよ」などの声が上がった。そこで、「先生は、みんなが夏休みの間、家庭準備室で仕事をするのだけど、暑くて困っているのですお金をかけずに、でも健康でいられる工夫はないかな」と具体的な場面を設定し、実践できることを考えてほしいと課題を提示した。子どもは、「準備室を見せてほしい」「食事もそこでとるの」など質問し始めた。

このように、正解が一つではない、全員が共通の土台として受けとめ合いができる課題は、思いや考えがいろいろな視点で数多く生まれるので活発な受けとめ合いができる。しかし、受けとめ合いで得られた情報が多すぎることで、それらをどのように判断するのかは別の手だてを打っていかねばならない。また、自分の生活とは離れている場面設定であったため、聞き合いが有効に働いていたとしても、自分の生活に生かしていくためには、別の手だてを組み合わせなければならぬと感じた。

(3) 自己決定を伴う体験的活動を取り入れる

6年生 「朝食のとり方を見直そう」

朝食づくりは、時間との勝負である。夕食に比べて、手軽にしかも手際よく作りたい。しかし、調理の経験が少ない子どもは、調理時間の短縮を図る工夫を考えることが難しい。そこで、実習の前に、試し調理を取り入れることで、切り方や調理方法の違いによる変化を体験し、自分の計画に必要なものを選択し、決定させることができるのではないかと考えた。

「材料の切り方を工夫すれば、調理時間を短縮できるのではないか」という考えが出てきたので、いくつかの野菜を使って試してみた。切り方の工夫に加え、厚みの調整も行ったところ、調理時間や調理方法による食感の違いを感じ取ることができた。試し調理を行って、気付いたことを受けとめ合わせ、自分の朝食作りの計画を見つめ直すことができた。

このように、共通の体験活動を行ったことで、自分の計画を修正するにあたっての方向性が明確になった。また、友達がどのようなおかずを作ろうとしているのかについてのヒントやアドバイスもより具体的に分かりやすくなることができた。

(4) 新たな価値と出会うための交流のしかたを工夫する

① 6年生 「毎日の生活をふり返ろう」

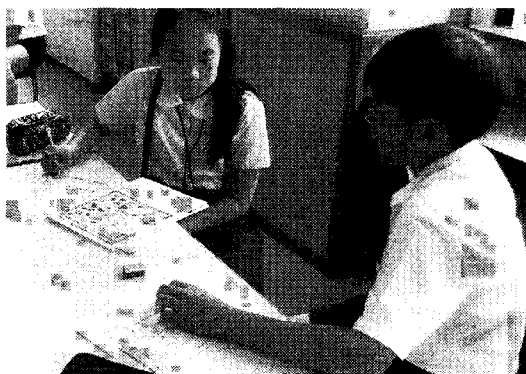
生活時間をふり返って気付いたことを、ペアで受けとめ合った。ペアで取り組むことで、共通点や相違点を明らかにして、質問したり、アドバイスしたりすることで、新たな価値と出会えると考えた。また、ペアで受けとめ合う際は、色分けした図表を見せながら行うことで、食事時間とその他の生活時間の使い方との関連についてなど、新たな視点に目を向けることができると考えた。

「私は休日の朝食時間について問題点があるけれど、相手は問題点とは考えていないようだな 私とはどこが違うのだろう じっくりと見比べて問題を解決できる方法を考えたい」「ぼくは、だれといっしょに食べているか考えてもいかなかった それも書き加えたい」などの新たな価値と出会えたという発言が聞かれた。

このように、ペアで行ったからこそ、じっくりと相手と向き合い、お互いに質問もたくさんし合い、新たな価値観と出会うことができたと思われる。しかし、ペアでの充実感は感じられたものの、全体にどのように広げていくかは今後の課題である。

② 6年生 「朝食のとり方を見直そう」

朝食作りにおいて、最終的には、家族や自分のために作るのだから、一人で作れるようになる



資料4 献立や手順をペアで交流する

ために調理実習で練習したいという願いもふまえ、一人調理を取り入れた。調理自体は一人で行うが、ペアの組み合わせを工夫することで、計画や実習に取り組む際に、自分では気付かなかった新たな価値に出会わせることができると考えた。

ペアの組み合わせを次の三種類に設定した。おかずに用いる材料は同じだが、主食（ごはん・パン）が異なるペア、献立は似ているが、おかずに

用いる材料が異なるペア、おらずに用いる材料は同じだが、献立を考えるポイントが異なるペアである。同じ材料を使っても、でき上がる料理は異なるので、新たな価値と出会うことができる。また、同じ料理を考えていても、材料によって炒める手順や味付けなどが異なり、新たな価値と出会うことができると考えた（資料4 前ページ）。

「一人で作るのは初めてだから少し不安だったけど、ペアの人が困っているところのアドバイスをくれたので、安心して作ることができた おいしくできたのは、ペアの人のおかげかも」「ぼくのペアの人は、トマトを入れたオムレツを作っていた 色合いがとてもよくて、味もおいしかった トマトを入れるなんて考えもしなかったけど、おいしかったので今度家でやってみようと思う」とふり返っている子どももいた。

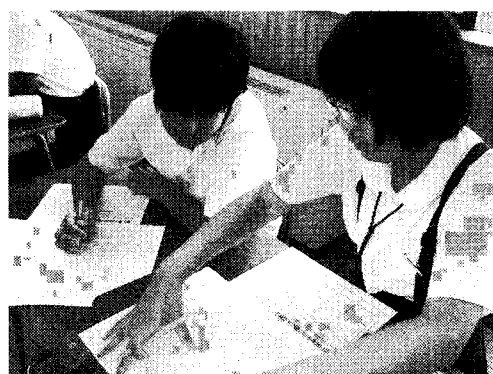
このように、相違点を取り入れることで、子どもは新たな価値に出会うことができた。また、共通点を残すことで、自分の計画にすぐに取り入れることができるような新たな価値とも出会うことができた。ペアを共通点と相違点のどちらも含んだ組み合わせにすることで、計画から実習、ふりかえりに至るまで、お互いのよさを生かしながら、新たな価値観と出会うことができると思われる。

(5) 評価方法を充実させる

6年生 「工夫しよう 快適な生活」

衣食住の視点で、暑い夏を快適に過ごす工夫について調べたことを全員が同じ判断基準で評価することで、受けとめ合いの土台がしっかりとしたものになり、自分の生活に生かそうとする見つめ直しができるようになった。

そこで、どのような判断基準を設定すればよいか話し合い、実現しやすさと費用のかからなさの二つに決めた。衣食住の三つの視点それぞれにABCの三段階評価とポイント制にすることで、偏った見方でなく、いろいろな視点でその工夫について目を向けることができた（資料5）。また、全員が同じ基準で評価することができるので、ふり返って見つめ直す時、どこがよくて、どこがよくなかったかがはっきりとした。



資料5 実現しやすさと費用のかからな
さの二つの基準で評価し合う

「なぜそれをするとはよくないのかも絵を使って分かりやすく書いてある」「代案が書いてあるのがいい」「住は実現しやすくお金もかからないので、自分もやってみようと思う」などそれぞれにコメントも書くことで評価された子どももそれをもとに見つめ直しに向かうことができた。

しかし、判断基準については全員が共通理解していたとはいえ、ペアによってばらつきが感じられた。評価する力を今後も継続してつけていく必要がある。

5 成果と課題

見つめ直しに向かうには三つの状態があると考え、それぞれの状態を見据えて手だてを講じてきた。確かめたい状態にするには、聞き合いの必要感を感じさせることが必要である。そこでは、自己決定を伴う体験的活動を取り入れたり、評価方法を充実させていったりすることが有効であった。整理したい状態にするには、受けとめ合いで多くの情報を手に入れさせることが必要である。そこでは、思いや考えが広がるような課題を設定したり、交流のしかたを工夫したりすることが有効であった。意外性を感じている状態にするには、無意識に行っていた生活行為を意識化させ、正解が一つではない課題を設定したり、自分にはない考えに出会わせる交流のしかたを取り入れたりすることは有効であった。しかし、状態や見つめ直しの始まりは、子ども一人一人異なる。それらをしっかりと見とることが大切である。一人一人異なる中で、共通の土台で聞き合いが行えるよう、さらなる手だてを講じていかなければならない。